

## 第2学年 体育科

### 「高く 遠くへ レッツ ジャンプ」

### 「一走・跳の運動遊び」



香川大学教育学部附属坂出小学校

体育科 山路 晃代

# 1 特別支援教育の視点から構成した授業づくりについて

## ① 準備、片付け等を短時間で出来るような視覚的支援

体育の授業では、たくさんの準備物がある。今回の走・跳の運動遊びもたくさんの場を子どもたちがが経験できるようにさまざまな場を設定しているため、教師が一人で準備をするのは大変である。だからといって、あらゆる場を作るためにたくさんの指示を出すのも大変である。そんな時には、あらかじめどのようなコースを作るのか、写真で示し、子どもたちが自ら活動できる機会を作るようにする。その際、右図のような印をつけて誰でもできるような配慮をしておく。場と物をマッチングさせることで、子どもたちの活動の場が数分で、しかも誰も困ることなく準備することができる。子どもに班ごとに分担した「秘密の地図」を渡すことで、わくわくしながら、準備をすることができるのである。また、他の友達がどのような場を準備しているのかは、分からないので出来上がりがさらに楽しみになるのである。



【マッチングできる支援】

## ② 1時間の学習の見通しがもてるような支援

活動が多い教科では、子どもたちは、「今、何を考え、何をしたらよいのかな？」と分からないことがある。特に見通しがたたないと不安になる子ども、ワーキングメモリーが少ない子ども等、いろいろな特徴をもっている子どもは、1時間の流れを視覚的に示しておくことで安心して活動に取り組めることがある。右の写真は、1時間の流れをカードに示した視覚的支援の一つである。この教具は、全体で1時間を捉える子にとって見通しがもて、部分で活動を捉える子にとっては、ことばとイラストでつないだカードを取り出して示すことで、今すべきことが明確になる。活動が終わればカードを裏返していくという活用を行うことで、残りの活動が分かたり、一つ一つの活動を確認しながら行ったりすることができるのである。100円均一のウォールポケットで作っている。このような教具は、一日の流れを示すこともできる。



【1時間の流れ】【1日の流れ】

本学級でも、教室に右写真のような一日の流れを見通せる支援を行っている。どちらも「終われば見えなくなる」という活用方法や操作を同じにしているため、子どもたちに混乱なく用いることができるのである。

## ③ 活動の時間の始まりと終わりが明確になる支援

活動を行い出すと、どうしても「止める」ということが難しい子どもがいる。それは、「終わり」ということばを聞き逃したり、気持ちの切り替えができにくかったりすることが原因となることが多い。そこで、「はじめ」と「終わり」を明確にするためには、子どもたちの記憶に残らせることが大事である。このような場合は、聴覚に働きかけを行うと効果的である。はじめの曲とおわりの曲を決め、常時行うことで記憶させるためである。その際、はじまりと終わりがはっきりした曲を用いることがお勧めである。今回は、歌詞がない曲を用いて実践を行ったが、歌詞があるものを用いて、このことばが出てきたら「そろそろ終わりだな」というように見通しがもてるものを用いても同様の効果が見られるだろう。本実践では、右の写真の曲を用いて縄跳びなど単調な活動をリズムに合わせて行えるようにしかけている。



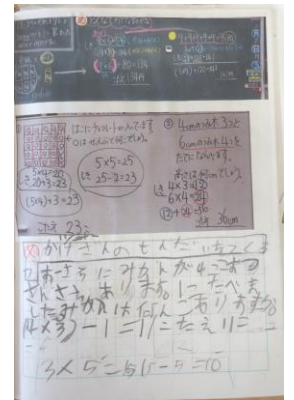
#### ④ これまでの学びを残しておくことで、自分の思いを伝える際に有効な手がかりになる掲示物

体育の学習では、活動しながら自分の考えをまとめていく機会が何度もある。また、感覚的に自分の体を動かすことで新たな考えを見つけていくこともある。自分が見つけた動きを表現する際、自分の動きをことばで示したり、再現したりすることが難しいことも多々見られることがある。そこで、これまでの動きをことばに起こしたものを掲示したり、動きそのものを写真で残したりしておくことで、自分の思いを語る際に有効な支援となる。前時までの学習した写真を基に自分の抱いた思いを伝えたり、掲示していることばを用いて自分の考えを伝えたりすることで、自信をもって発言することができるようになるのである。

#### ⑤ 子どもの特性を見抜く目と感覚を

学級の中には、いろいろな特性をもった子どもがいる。そのため教師は、目ごろからどんな活動のときに困ったことが起きているのか、どんな子どもたちが困っているのかよく観察し、どんな支援を行えばよいのか考えることが特別支援教育の第一歩であると考える。子どもの困り感を感じられる目と子どものできるようになりたいと思う心を知ることで、有効な支援がひらめくことがある。少しがんばれば乗り越えられることはがんばらせるが、そこで困らせるよりも、もっとがんばらせるところがある場合は、支援を行うようにする。こうすることで、自分でできたという気持ちを蓄えていくことができるのである。

本学級の児童の中に「書くこと」に困り感を感じている子どもがいる。その子どもには、自分の考えだけは書く、というように量を精選して書かせている。書き写す量を精選することで学習内容が十分に習得されないのではないかという恐れがあります。それを補うために、右図のように板書を写真で撮り、それをノートやワークシートに貼るという支援を行っている。自分が書いたものでは前時の学習が分かりづらく、はじめからつまづくことが想定される。このような支援を行うことで、板書写真を手がかりに学習内容を想起し、本時に自信をもって向かえることができるのである。



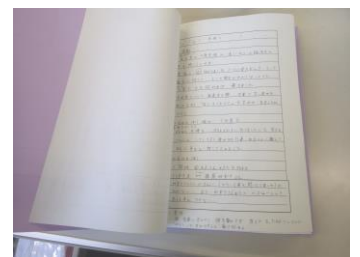
【算数のノート】

## 2 同じ思いをもって子どもと関わるために（支援員さんと連携して）

### ① 情報交換を密に（日常の会話と情報交換ファイル）

子どもの成長を同じ目線で見守り、支援してもらうためには、「どのような子どもを育てたいのか」を共有しておく必要がある。そのために、学年のはじめに教師の教育観を伝えておくようにする。私の場合は、「自分のことは自分でする」という自立できる子どもを育てたいということを伝え、見守ることを大事にしてほしいとうことを伝えている。でも、どうしても困っている時には、解決の方法をアドバイスしたり、手を貸したりしてほしいことも合わせて伝えている。

また、同じ歩調で子どもに接することを大事にしている。そのためには、日々の情報交換を大事にしてどのような支援が有効か支援体制を相談しながら行うようにしている。時間を設定して行うのではなく、気付いたことや感じたことを子どもたちが下校した後に、伝え合うようにしている。時間が取れない時には、気付いたことをまとめられるようなファイルを用意し、それにお互いが記入し、情報交換を行えるように工夫している。堅苦しいものではなく、簡単にまとめることができるようにものになっている。



【情報交換ファイル】

## ② 想定される困り感を先に伝えておくことで、有効な支援を

支援員の先生方が一番困るのは、きっといつどのような支援を行えばよいか、ではないだろうか。いくら情報交換を密にしても、やはり支援方法の何が一番よいのか迷ったり、これでよかったのかなと悩んだりするのではないだろうか。そこで、有効な働きかけとして、担任が子どもの困る状況を事前に伝えておくことが大切である。そして、どの程度まで見守り、どのような状況になったら支援を行うのか等、支援のタイミングや支援方法を伝えておくことが大切である。その際、教師の動きや行う活動等、想定する事柄を合わせて伝えておくことで、タイミングに困ることはないと思う。それぞれの教科や活動によって異なることもありますが、1時間の学習スタイルがある程度決まっていれば、一番よいタイミングに支援を行えるのではないだろうか。具体的な場面が想定される時は、場面と支援方法をつないで伝えていくことで、よりよい支援が行えることができるのである。そして、教師たち自身も振り返りを行うようにしている。想定していた時期に支援が必要であったか、支援方法は子どもにあったのか確認することが、今後のよりよい支援につながるのである。(研究紀要 160 頁参照)

## ③ 無理のない支援体制を（「ありがとうと一緒に」の心を）

何よりも支援する教師間の関係が子どもによりよい支援をもたらせることができる。いつでも話せる雰囲気とどんなことでも伝え合うその関係が、子どもによりよい支援を行えるものだと思っている。当たり前かもしれないが、感謝の気持ちと一緒に子どもをよくしようという思いが、よい支援体制を作るのではないだろうか。

### 〈参考文献〉

- |  |       |        |
|--|-------|--------|
| ・小学校学習指導要領解説体育編                                | 文部科学省 | 2008 年 |
| ・学習指導要領改訂のポイント 小学校・中学校 体育                      | 明治図書  | 2017 年 |
| ・動きの「感じ」と「気づき」を大切にしたい陸上運動の授業づくり                | 教育出版  | 2012 年 |
| ・楽しい遊びの動的環境による LD・ADHD・高機能自閉症児<br>のコミュニケーション支援 | 明治図書  | 2005 年 |